



O K A Z A K I
C I T Y M U S E U M S | VOL.39
N E W S



エッセイ

「あら、尖端的ね。」の表と裏

平成21年度展覧会スケジュール

あら、尖端的ね。

—大正末・昭和初期の都市文化と商業美術

展覧会アンケート中間報告

「石山寺の美」展 イベント報告

関本有漏路 ポスター図案
『酒・醤油・味噌・食品店広告図案集』1930年

II
OKAZAKI
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館

「あら、尖端的ね。」の表と裏

館長 芳賀 徹

「あら、尖端的ね。」

これは今回の展覧会のために、担当の学藝員千葉真智子さんが、昭和初期の映画ポスターや映画雑誌などから見つけてきた言葉らしい。

たとえば10年前に神奈川県立近代美術館で催された「モガ・モボ1910-1935」展の図録をあけてみると、すぐに、こんな映画広告が眼に飛びこんでくる。『キネマ旬報』。昭和5年（1930）の各号に載った、デザイナー河野鷹思の絵とロゴタイプによる広告だ。

「アラその瞬間よ」

「好きで一緒になったのよ」

「續 愛して頂戴」

「尖端的だわね」

「尖端に立つ女」

なるほど、なるほど、昭和の初めの世相とその雰囲気がいっぺんによみがえってくる。千葉さんの話によると、デパートなどの高層ビルからの飛び下り自殺を、当時は「尖端自殺」と呼んだりもしたそう。昭和初期の、少なくとも都会の男女は、なんでも「尖端的」であること、つまり時代の流行の先頭に立つだけでなく、もっと細くするどく突きぬけて尖っていることが大好きだったようだ。河野鷹思の「尖端的だわね」の画面には、「常に流行のトップを切る」とのキャッチフレーズまでがついている。

河野鷹思
1930年

このような宣伝文句や河野鷹思風のモダニズムが、一方ではたいへんつかしくも思われるのは、私自身が戦前昭和の、それも昭和6年（1931）というような、上の広告と同じころの生まれだからだろうか。

昭和6年といえば、その9月に関東軍が満鉄線路爆破を口実に満州事変を開始した年としてばかり教科書では習ったが、生まれたての赤ん坊にはもちろんそんな遠い所での戦争はなんの関わりもなかった。だが私の父は昭和初めの東京高等師範学校文科在学の半ばごろから「赤」くなり、文字どおり尖端的なマルクスボーイとなっていた。昭和6年には、

卒業を目前にして、新興教育運動のビラまきをして築地警察署に捕まり、ブタ箱に入れられた上に学校を退学させられてしまった。東北の田舎から出て東京のエリート校に行っていただけに、いっそう尖端的に、尖鋭になっていたらしい。

しかも悪いことに、父は前の年、22歳の若さで、金もないくせに、同郷の同い年の女性、つまり私の母とすでに結婚していた。それも、田舎の県庁所在地のプロテスタント教会と一緒に讃美歌を歌ったりしていたころからの馴初めで、「好きで一緒になったのよ」であったという。

こうして翌6年の初夏に長男の私は生まれたのだが、父は「赤」で退学のためどこにも就職のあてはない。母が古いタイプの職業婦人、つまり小学校教師となって一家三人を養うこととなった。母かたの祖母が、父が自殺したりはせぬかと心配で家のをぞきに行くと、父は赤ん坊の私を抱いて留守番をしながら泣いていたそう。これも当時としては、少しずれた意味合いでなかなか「尖端的」な一情景であったろう。

それから4年も精神的彷徨をし、転向した上で、父はあらためて高等師範を卒業し、地方の中学校の教師をし、普通より7、8年も遅れて東京文理大の国史学科に進学した。母もそれにあわせて東京の小学校に転職した。私と妹は田舎の母かたの祖父母の家にあずけられて学校に通っていたのだが、夏休み、冬休みなどに東京から帰ってくる父母を迎えるたびに、田舎少年の私は彼らの「尖端的」な出で立ちと振る舞いに、眼をみはり、ハラハラしたのである。

父は頭髪をきれいにわけて中折帽やカンカン帽に颯爽たる背広姿。その鞆から出てくるおみやげはアルコールランプを使う蒸気機関や、風車も起重機も組み立てられるスチール製の「デルタ」の一式。本は『世界童話集』の類の分厚い数冊。そして母は、呼びかたも知らぬハイカラな帽子を斜めにかぶって、ヒラヒラの洋装にハイヒール。嬉しくて抱きつくとなにかいい香水の匂いがした。その化粧バッグも私の好奇心の対象で、そっと開けてみると小型の手鏡や、おそらく資生堂のお白粉のパフやくるくる廻る口紅のケース。とうに「日支事変」が始まっても、東京の大学生夫婦はプチブル的モダニズムを守り、享受していたのだ。

田舎の老祖父母、とくに明治10年生まれで頑固な農林技師たる祖父には、この若夫婦の東京ぶりが気に入らなかった。金もないくせに身につけているものが贅沢だ、肌の色が白すぎる、また御飯のおかずをちょっぴり残してけしからん、子供の前で映画とかコーヒーとかの話をするな、屋敷の芋畑でテントウ虫退治でもせよ—と、いちいちうるさいお小言の連発だった。

父母の子にして祖父母の孫たる小学生の私は、両方の間に入ってハラハラするばかりであった。そして昭和東京の「あら、尖端的ね」のハイカラぶりと、同時代田舎の日本の二宮尊徳的勤勉主義との二重性、その表裏両面を、幼なごろにもはっきりと経験することができたのである。

平成21年度展覧会スケジュール

企画展 細見美術館展

4月11日(土)～5月10日(日)

日本美術の優品を所蔵する京都・岡崎の細見美術館のコレクションから構成します。俵屋宗達や尾形光琳らの琳派と呼ばれる華やかな芸術様式を紹介するとともに、近年特に人気のある伊藤若冲の優品をはじめとし、仏像や荘厳具などの仏教美術、平安・鎌倉・室町の物語絵や調度品も展示します。日本人の美意識を語り、日本美術のもつ優美さ、繊細な感性を十分に堪能することができる展覧会です。ご期待ください。



伊藤若冲 《雪中雄鶏図一幅》 江戸時代

企画展 ピサロ展

5月16日(土)～7月12日(日)

19世紀後半に活躍した印象派の中心的存在であったピサロ。この展覧会は、印象派に影響を与えたコロー、ミレーの作品からクルーベ、モネ、ルノワールをとおして、風景画の流れを追いながら、ピサロの残した功績の大きさを再評価するものです。



カミーユ・ピサロ《窓からの眺め、エラニー＝シュル＝エプト》1888年 油彩

収藏品展 おかざきの考古学

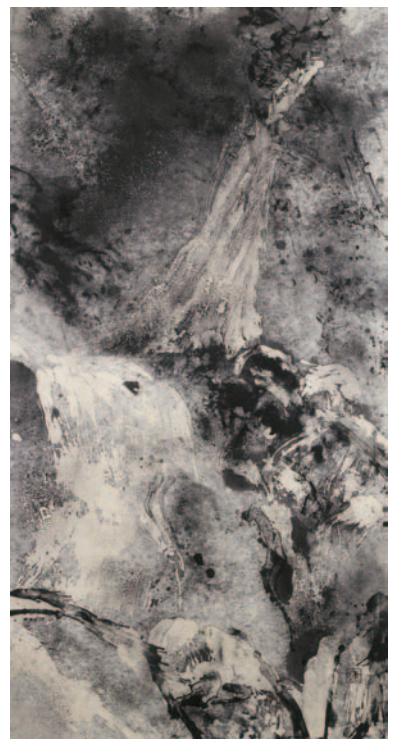
7月18日(土)～9月6日(日)

岡崎市内では350ヶ所を越える遺跡が確認されており、質量ともに愛知県内でも有数の考古資料の宝庫でもあります。本展では市の所蔵品を中心にして、郷土の考古資料を幅広くご紹介する予定です。

企画展 菅原健彦展

9月19日(土)～11月8日(日)

第2回東山魁夷記念日経日本画大賞展で大賞を受賞し、新たな日本画の探求者として注目される菅原健彦。本展では、大都会の景観を大胆に切り取った初期作品から、薄墨桜や雲水峽などの大自然を描き出した近作まで、彼の画業の全貌をご紹介します。美術館では最初の大規模個展であり、本展にあわせて制作される新作も見逃せません。



菅原健彦
《無名の滝》
2003年

企画展 臨濟宗の美術

11月21日(土)～1月17日(日)

天恩寺をはじめとする三河の臨濟宗寺院の資料をもとに、禅の文化の粹や寺勢の盛衰に深く関係した足利氏など地域の有力者との関係をご紹介します。

企画展 ロシアの夢

1月30日(土)～3月28日(日)

1920年代から30年代のロシアでは、前衛芸術家たちが革命後の新しい社会創造に向けて、伝統的な絵画や彫刻の枠を越え、建築、演劇、デザイン等様々なジャンルで積極的な活動を展開しました。本展では、その熱気を写真資料を交えながら、広くご紹介します。

※上記展覧会予定は変更する場合があります。

あら、尖端的ね。——大正末・昭和初期の都市文化と商業美術

学芸員 千葉 真智子

「あら、尖端的ね。」

こう言われても、ほとんどの人は何のことかさっぱり分からないでしょう。それに、ここでこの言葉を音読できない人もいるかも知れません。「あら、尖端的ね。」こう書き換えれば、ピンとくるでしょうか。先端的、つまり「一歩先を行っている。」ということなのですが、常用語の「先端」と「尖端」とでは、やはりニュアンスが異なります。「尖」は「とがった」の意を持っており、「尖端的」には、より先鋭的で、大胆で、目新しいイメージが含まれています。

さて、こうした意を持つ「尖端」という言葉は、大正末・昭和初期にかけて大いに流行しました。「新しさ」や「斬新さ」が、時代の象徴としてもはやされたのです。1923年の関東大震災以降、東京では都市の復興とともに、消費・商業文化が急速に進展し、1925年に人口200万人を超える「大大阪」時代を迎えた大阪でも、モダン文化が華やかに街を彩るようになりました。名古屋も然りで（この頃の名古屋については、馬場伸彦氏が『周縁のモダニズム モダン都市名古屋のカラーージュ』で紹介しています）、都市化の流れは、必然的に新しいものを求める機運を生み出したと言えます。資生堂やライオン、花王といった今も続く大企業や松坂屋、三越、高島屋などの百貨店が、商品の販売だけでなく、商品を通して、新しい生活習慣を定着させ、豊かな生活文化を生み出そうとしたのもこの頃のことです。そこで、典型的な例として、非常に面白いものが残されているので、一つご紹介しましょう。ライオンが、口腔衛生運動の一環として、1930年に発行した『健康の合理化』（図1）と題するリーフレットです。真っ赤な口が浮遊する表紙。その裏表紙には、高層ビル群を背景に「時代の尖端は、夜、ねる前の歯磨」という標語があり、



図2 『マツサカヤ』1930年7月号

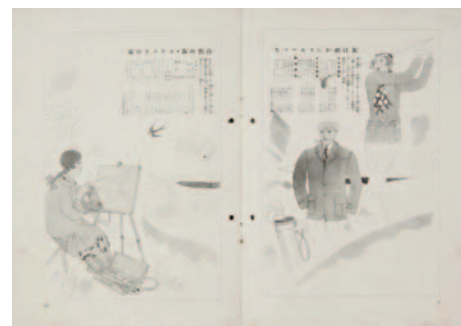


図3 『マツサカヤ』1929年4月号



図1 『健康の合理化』1930年

も花の唇を一寸あげれば、お口の中には黒い汚いムシ歯が一ぱいあります。…」とのテキストを掲載して、地下鉄や当時話題を呼んだドイツの飛行船ツェッペリンなどの「尖端的」イメージと歯磨きの習慣の尖端性とが結び付けられているのです。

今回の展覧会は、「尖端的」であることが求められたこの時代特有の風俗・都市文化と商業美術をご紹介するもので、その牽引役であった新進企業の所蔵資料（史料）も数多く出品します。資生堂、花王は自社の美術館を持ち、ライオンも小スペースながら、自社の文化活動を展示する場を設けるなど各社ともに自社史料の歴史的・美術的価値を認識され、展覧会にも快くご協力していただきました。また愛知県の方には非常に馴染みの深い松坂屋の所蔵資料も出品する予定をしています。三越などは、杉浦非水が広告図案を手がけたこともあり、これまで多くの美術館展覧会で紹介されてきましたが、同時代の松坂屋の活動については、実際のところあまり全貌が分からない状況にありました。しかし、伺ってみると、その活動内容においても、現存の資料においても興味深いものが数多くあり、京都にある染織参考館には斬新な着物図案も多く保管されていました。そこでほかの百貨店にも触れながらこの場を借りて、少しご紹介したいと思います。

当時、百貨店として第一線に位置していたのは、三越、白木屋（のちに東急百貨店へ）、高島屋、松坂屋、松屋ですが、各店は、早くから広告の重要性を認識し、ポスターや新聞広告に留まらず、自社の機関誌の発行も手がけていました。三越の『花



図4 『マツサカヤ』1930年11月号



図5 (左) 前川千帆『マツザカヤマンガ ピンコちゃんモノガタリ』1933年
(右) 田河水泡『マツザカヤマンガ マツ坊とサカエさん』1934年

ごろも』『三越タイムス』『大阪の三越』、白木屋の『家庭のしるべ』『流行』『白木タイムス』、高島屋の『新衣裳』、松屋の『今様』『松屋グラフ』、また松坂屋では『衣道楽』『モ—ラ』(さまざまな商品を「網羅」していることに由来している)に続いて1929年から名古屋店で『マツサカヤ』(図2)を、1935年から東京店で『新装』の発行に乗り出します。こうした機関誌は、単なる商品カタログとは異なるもので、山のぼりやゴルフなどの流行のレジャーを商品とともに紹介したり(図3)、子供服の紹介にしても、最新の洋服を着たモダンな子供の写真を添えるなどして(図4)、百貨店に「流行」の発信源としてのイメージをまとわせ、さらに有名作家の随筆や小説を掲載することで、高質な文化の場としての百貨店イメージを作り出しています。

試みに『マツサカヤ』に目を通してみましょう。パステルカラーの表紙には、流行の耳隠しの女性やモダンな洋装の女性——「モガ(モダン・ガール)」という耳慣れた言葉や、写真・絵画に表現されたモガのイメージを通して、私たちは多くの女性が、洋装で街を闊歩していたかのように思っているが、実のところ、「考現学」で知られる今和次郎、吉田謙吉らが1925年に行った通行人調査によれば、当時一番の都会であった銀座にさえも「洋装」の女性はわずか1パーセントしかいなかった!——が描かれており(1930年3月号から7月号まで、東京美術学校出身の画家船橋治彦が表紙を手がけています)、中を見れば、写真や挿絵を使ったモダンなページ構成がとられ、女優山本安英や杉浦非水の妻でもあった歌人杉浦翠子など「新しい女性」による随筆も度々掲載されていることが分かります。こうした誌面からは、流行や美意識の形成に如何に百貨店が深く関わっていたかを窺い知ることができるでしょう。

ところで、こうした機関誌を見ていてもう一つ気づくことがあります。それは、誌面に多くの子供や子供のための商品が登場するという事です。実は新しい生活習慣を浸透させるための媒介役として子供の存在が目され、子供のための教育的・文化的な取り組みが活発になるのがこの頃なのです。たとえば、子供のための絵である「童画」という言葉が、武井武雄によって初めて使用されたのが1925年のことであり、ライオンが口腔衛生活動のために「子供歯磨き大会」を開催し、資生堂が子ども向けの洋服販売を手がけるようになるのも同じ頃のことでした。



図6 今和次郎
《東京銀座街風俗記録》1925年

洋服は、洋装の女性が少ないなか、衛生的で活動的であるとの理由から、子どもには積極的に採用されるようになったのです。

そこで、松坂屋の試みとして興味深いのが1933年から始まる『マツザカヤマンガ』の発行です。(図5)これは、麻生豊、前川千帆、島田啓三、『のらくろ』で有名な田河水泡など、当時の人気漫画家が、お茶目なピン子ちゃんの姿や、愛らしいマツ坊とサカエさんのやり取りを4コマ漫画に描いたもので、ひと月に3回のペースで配

布され、好評を博したことから、双六版も制作されました。漫画という馴染みやすい媒体を使い、子供の心を捉える手法には、百貨店の先進的な姿を認めることができるでしょう。

最後に着物図案に触れておきましょう。今和次郎の考現学調査により、1925年の大都会銀座においてさえ、洋装の女性は1パーセントに過ぎなかったことが明らかになった訳ですが(図6)、では女性たちがお洒落を楽しんでいなかったかと言えばそんなことはありません。化学染料を使った派手な銘仙が大流行したのをはじめ、多くの女性が、着物のなかに新しいモダンなデザインを求めたのです。こうした女性の期待に応える、いや欲望を煽るべくと言いましようか、与謝野晶子など著名人の意見を取り入れた高島屋の百選会をはじめ、各百貨店の着物図案研究機関は、毎年春と秋にその年の流行色や模様などの基本となる着物図案を発表し、各地の織物業者が、その標準図案をもとにそれぞれ反物のデザインを考案・商品化するようになります。いわば、百貨店によって毎年の着物の流行が作られるようになるのです。松坂屋でも流行会が設置され、1927年から毎年、着物の標準図案が発表されたのですが、今も残る図案の数々を見ると、その斬新さに驚かされるばかりです。近代感覚模様として発表された「大都のリズム」や「洋館」、ここにみる近代都市のモチーフや抽象絵画かと思うような幾何学模様には、流行の発信者としての百貨店の気概を認めることができるでしょう(図7)。

ものが溢れ、広告宣伝などの付加価値によって、次々と新しい流行が生み出され消費されていく現代の私たちの生活。その原点は、この大正末・昭和初期の時代に見出されるかもしれません。しかし、そこには、今以上に新しいものをつかもうとする強い希望や夢があったように思われてなりません。



図7 川崎武雄「洋館」
『松坂屋基調図案集』1930年

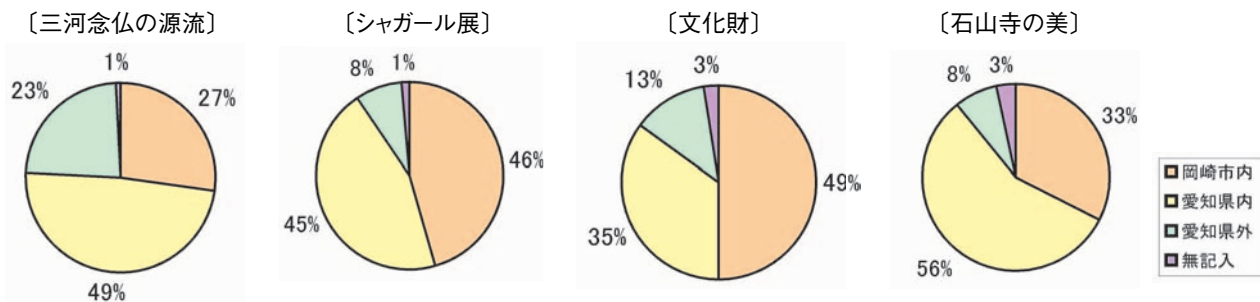


図8 笠松豊二「大都のリズム」
『松坂屋基調図案集』1929年

展覧会アンケート中間報告

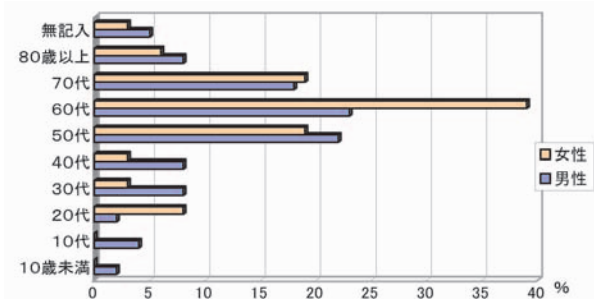
展覧会名	開催期間	入場者数
三河念仏の源流 — 高田専修寺と初期真宗 —	4/26(土)～5/25(日)26日間	5,703人
色彩の詩人 シャガール展	6/1(日)～7/13(日)37日間	26,372人
文化財—守り、伝える	7/19(土)～9/28(日)62日間	3,626人
石山寺の美 — 観音・紫式部・源氏物語	10/11(土)～11/16(日)32日間	9,678人

■ どこからお越しくされましたか？

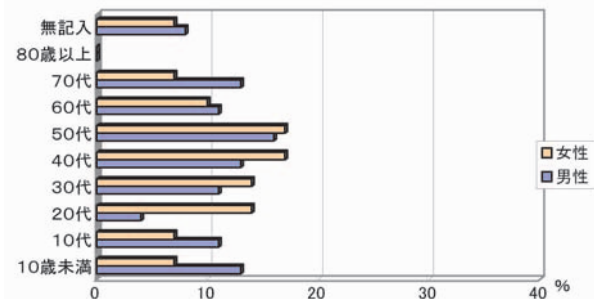


■ 性別・年齢別

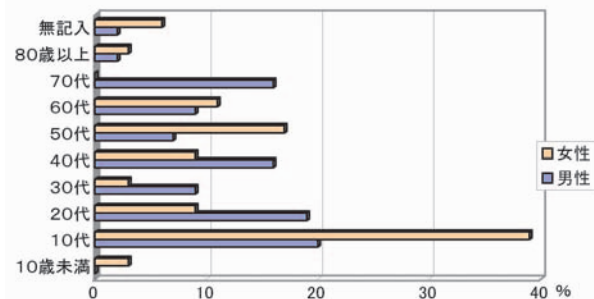
〔三河念仏の源流〕



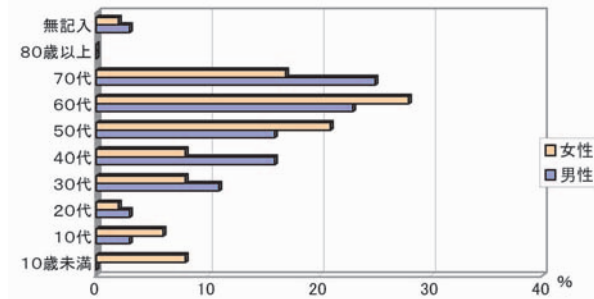
〔シャガール展〕



〔文化財〕



〔石山寺の美〕



当館では、美術館活動の参考にするためアンケート調査を行っています。アンケートの回答は入場者数に対して約1%という少ない割合ですが、来館者の生の声として館活動に反映させる唯一の手がかりとなっています。

今回、紙面に掲載するのは、今年度の展覧会における来館者の居住圏、性別、年齢層です。展覧会によって来館者は上の表のようになりますが、海外有名作家の「シャガール展」、

地元資料が中心となった「文化財展」を除く展覧会は市外からの来館者が目立ちます。また年齢層は男女とも中高年層が圧倒的に多いことから、今後の館活動の支援基盤を考えた場合、非常に心強いものを感じます。

市民の方にもっと気軽にきて頂けるようにするには、魅力ある企画展はもちろんですが、身近な地元資料の紹介、ミュージアム講座などの親しみやすい教育普及活動が必要です。

「石山寺の美—観音・紫式部・源氏物語」展 イベント報告

講演会 平成20年10月12日(日)

「源氏物語における愛と死の情景」 講師:芳賀 徹(当館館長)

舞台は四帖の夕顔です。マダム夕顔との甘く切ない恋の行方は?はかなさ、無常、ものあわれを17歳にして体現する光君…。芳賀ワールドにポカンと酔いしれる聴講者は意外にも男性が多かったのに驚き。全国展開した『源氏千年紀』発起人の一人である館長曰く「源氏を知らざる者は日本人にあらず」だそう。



講演会 平成20年10月19日(日)

「石山寺縁起絵巻と石山寺の歴史」 講師:梶谷亮治(東大寺総合文化センター設立準備室長)

本展の監修者である梶谷氏は仏教美術がご専門、昨年度まで奈良国立博物館学芸課長でおられた方。スライドを使い展示作品の解説や縁起絵巻の詳細な紹介で石山寺の歴史をお話いただきました。



講演会 平成20年11月1日(土)

「源氏物語の絵画化—石山寺所蔵作品を中心に」 講師:片桐弥生(静岡文化芸術大学准教授)

当日は『紫式部日記』中で源氏物語の登場が記されてから千年という記念日。片桐氏は、学生の頃から石山寺所蔵作品に接してこられた源氏絵の達人。狩野派をはじめ土佐派、住吉派などやまと絵流派の十八番となる源氏絵を場面説明で終わることなく、各派の特徴となる場面設定や見所などをあげ、かなり御得感があった内容。



講座 平成20年10月25日(土)

「源氏香体験!」 講師:石川阿季子(香道御家流)

5回香を聞きその組合せで源氏物語の帖名を当てる源氏香。舞台でお点前が進む中、石川氏の説明のもと、伽羅を含む豪華な組合せを座席の参加者も一人ずつ体験。因みに正解の「明石」を当てたのは40人中ただの一人。お点前に使用された蒔絵香道具「菊露」、香木の質問もあり、敷居が高いイメージから香道がぐっと身近になった様子。これを機会に香道を始めませんか。



講座 平成20年11月9日(日)

「平安のかさね—草木の精と糸染めと—」 講師:小林敬子(染織家・日本工芸会正会員)

源氏物語が生まれた時代の色、それを生む草木、色のかさね。身分に応じて貴人が身に着けた色を紹介。平安人の美意識を再認識したひとときでした。豊川市の小坂井町にある兎足神社より男子の装束が特別出品されたほか小林氏制作のさもものや糸染も飾られ華やいだ雰囲気で行。会場は満員で小林氏の人気の高さがうかがえました。



映画 平成20年11月2日(日)

上映会 「源氏物語」(1951年/監修:谷崎潤一郎、監督:吉村公三郎)

平成20年11月3日(月・祝)

「千年の恋/ひかる源氏物語」(2001年/監督:堀川とんこう)

上映条件として定員は50人厳守。特に長谷川一夫主演の『源氏物語』はビデオやDVDの市販はないとか。整理券はあっという間に完配。その期待度が察せられました。往年のトップスターやアイドルの競演にあちらこちらからため息や笑い声も。

展示説明会 平成20年10月18日(土)、11月8日(土)

こども向け、おとな向け

今回こども向けの展示説明会を初めて開催。美術教育を研究する静岡大学大学院生の太田真喜さん、佐藤槇子さんを助人に待機したところ、初回に来てくれたのは、慶真君(矢作東小学校6年)と崇真君(同1年)の大須賀兄弟だけ。マンツーマンのレクチャーになってしまい二人は超緊張!でしたが最後まで熱心に鑑賞してくれました。ロウベン、ニョイリンカンノン、ダイニチニョライ…まだ覚えているかな?



INFORMATION

■展覧会スケジュール

2008年11月29日(土)～2009年2月1日(日)

歴史への誘い — 武士・信仰・民衆 —

近年新たに収集された博物資料のなかから未公開のものを中心にご紹介します。甲山寺や高隆寺の仏画をはじめとする寺院資料や江戸時代の商家に伝わった文芸書や茶道具、冷泉為恭筆の絵画などで郷土岡崎を語ります。

2009年2月14日(土)～3月29日(日)

あら、尖端的ね。 — 大正末・昭和初期の都市文化と商業美術

大正末・昭和初期になると都市文化が成熟し、商業活動や市民生活のなかに様々な形で芸術が取り入れられるようになりました。そこには、既存の芸術ジャンルを横断・越境して活動する芸術家の姿があり、また芸術に参画しようとする企業や一般市民の志向を認めることができます。本展では、当時の越境的な「芸術」の諸相を、商業美術品や雑誌メディア、また日用品なども含めた多彩な作品資料を通してご紹介します。

●開館時間／午前10時～午後5時

〈入館は閉館時間の30分前まで〉

●休館日／毎週月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

※展示替えのため臨時休館することがあります。

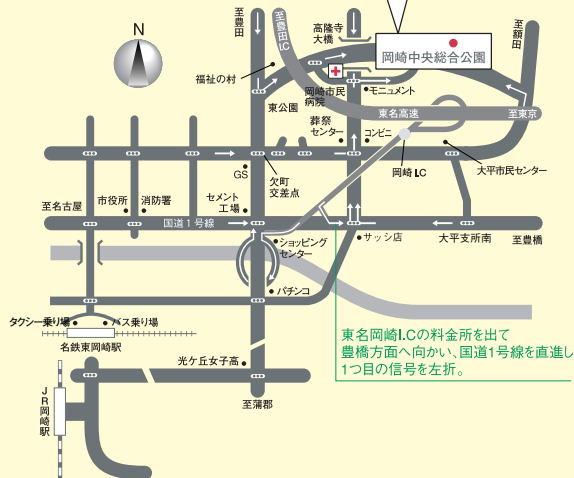
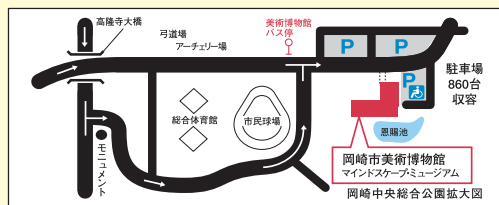
◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、

(名鉄バス) 「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分

◎タクシー／名鉄東岡崎駅から約15分

JR岡崎駅東口から約25分

◎自家用車／東名高速道路・岡崎ICから約10分



OKAZAKI CITY MUSEUM



【岡崎市美博ニュース／アルカディア】

●Arcadia 第39号 ●2009年1月発行 ●編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

岡崎市美術博物館 〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL0564-28-5000(代表)

ホームページ <http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>



古紙/パルプ配合再生紙使用